宜野湾市で発生したフタホシハゴロモによる皮膚炎事例

衛生動物室　比嘉ヨシ子
下謝名和子

山野や圃場などに生活しているハゴロモ類が、多発して牧草やサトウキビなどに、被害を与えた事例は過去に農林関係で数例の報告があったが、多発時に人家内外に飛来して、不快感による衛生害虫化はなかった。そこで宜野湾市の新興住宅地域で発生したフタホシハゴロモによる被害例は、不快感だけでなく、皮膚炎を起こしたので、衛生害虫の新顔として報告する。

被害の概略

1979年８月中旬から同年11月中旬にかけて、宜野湾市の志真志団地内の住宅地域で、小蛾のような不明昆虫の多発によって被害が発生したと、宜野湾市役所ならびに被害者から当衛生研究所へ調査依頼があった。

被害は連日、夕刻から夜間にかけて続いた。多数の虫が灯火を求めて、家屋の窓ガラスや玄関な

図１　フタホシハゴロモの被害地

どへ、覆い重なるように飛来し、また、開放された所やすき間から虫が一斉に屋内侵入する状態であった。とくに電灯の周囲を飛びまわり、住民は多発した不明昆虫による不快感と恐怖心から、飛来時刻の夕刻になると、ガラス戸を閉め、さらに侵入を防ぐためにカーテンを閉めたり、雨戸をしめたりした。このような被害は各戸訪問による聞き取り調査によれば、サトウキビ圃場に隣接した12戸におよび、その中、人体被害が2例あった

表1　聞き込みによる被害範囲

戸数	屋内飛来	窓や戸が開けられないほどに飛来があった	不決感	皮膚炎症
1	⊕	⊕	⊕	⊕
2	⊕	⊕	⊕	⊕
3	⊕	⊕	⊕	−
4	⊕	⊕	⊕	−
5	⊕	⊕	⊕	−
6	⊕	⊕	⊕	−
7	⊕	⊕	⊕	−
8	−	⊕	⊕	−
9	−	⊕	⊕	−
10	−	⊕	⊕	−
11	−	⊕	⊕	−
12	−	⊕	⊕	−
13	−	−	−	−
14	−	−	−	−
15	−	−	−	−
16	−	−	−	−
17	−	−	−	−
18	−	−	−	−
19	−	−	−	−
20	−	−	−	−

被害地の状況：

発生地一帯は、数年前まで原野とサトウキビ圃場であったが、都市化の波に乗って開発された地域で、現在も志真志団地内には、300坪程のサトウキビ圃場が残っていた。

その圃場をとりかこむように20数戸の住宅があった。

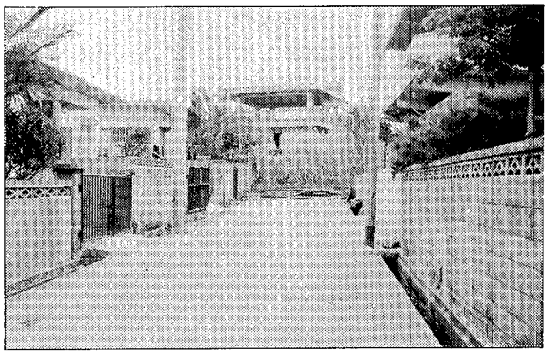

図2　発生地の団地内圃場

人体被害例：

多発期間中に、住民のうけた一般的な環境被害とは別に、2名が皮膚炎を起こし、そのうち症状の激しい1人が医療機関に治療を求めた。

症例1：A（宜野湾市志真志団地）60代(女)1979年10月4日午後8時頃、屋内飛来したハゴロモに触れて、首、胸部にかけて腫れ、痒みはないが、水泡状になって痛みがあり治療中。

症例2：B（志真志団地内）3才児（女）同虫の屋内飛来時に、軽るい皮疹を伴ったが、数日して自然治癒した。その後もかぶれた痕跡が残っている。

加害虫：

フタホシハゴロモ Riccania binotata Walker

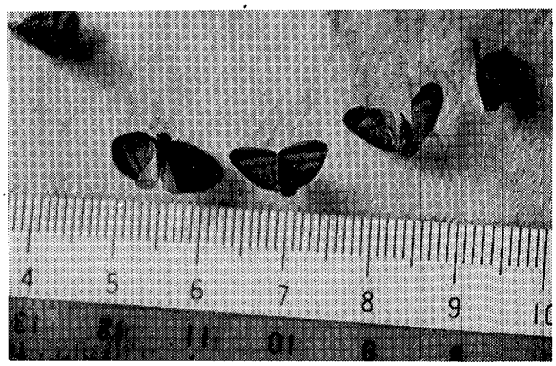

図3　フタホシハゴロモ Ricania binotata walker

表２　サトウキビ畑で採集した昆虫とヤスデ類

種　　類	個　体　数
フタホシハゴロモ	１８０
ネッタイイエカ	5
ヒトスジシマカ	2
ヤケヤスデ	3
ババヤスデ	1
ヒメヤスデ科の一種	2

１平方メートル当りの環境害虫

発生地でスィーピング法（１㎡当たり２振り）によって多数のハゴロモ類を採集した。（表２）被害者に確認を取ったら、加害虫とのことであった。標本を原色昆虫大図鑑（北隆館）でしらべ、フタホシハゴロモと思われたので、琉大農学部の東清二教授に確認のため同定してもらったら、フタホシハゴロモであることが判った。

それで、著者らが同種による皮膚炎が起こるかどうか確認のために、積極的な皮膚接触試験を行った。個人差はあるが実験者２人とも接触による皮疹が認められた。

表３　接触試験によるかぶれの状態

接触後の経時変化		被検者 S.	被検者 H.
一回目	１０分後	＋	－
	２日目の朝	＋	＋
	２日目の午後	±	＋
二回目	１　日　目	－	＋
	２　日　目	－	＋

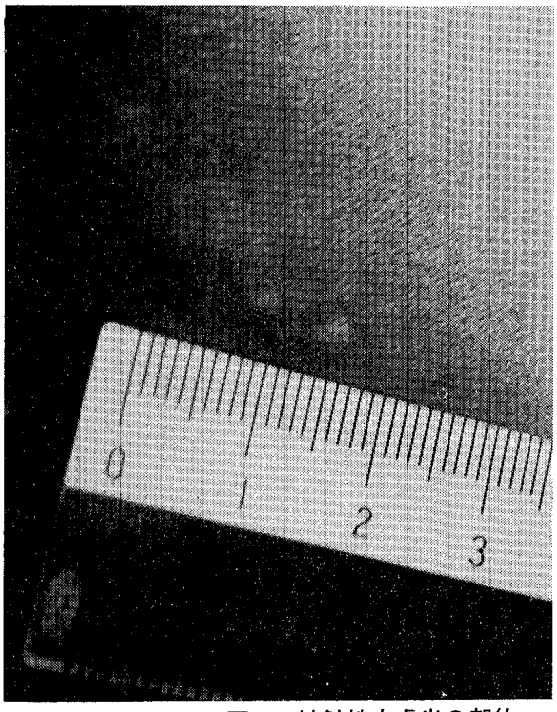

図４　接触性皮膚炎の部位

考察：

わが国でも、これまでに夜間しばしば多数屋内飛来し、手甲や頸部稀れに顔面などを刺咬する虫として、タイコウチやミズムシ科、ヨコバイ科などが報告されている（素木、1958）。特異体質の人は、一般昆虫類に対してもかぶれる場合があると言われているが、上述と類似したハゴロモ科による皮疹が、稀に起こり得ることが本症例で判った。

フタホシハゴロモの被害地、宜野湾市一帯は近年、都市化がすすみ、サトウキビ圃場と住宅地が隣接した状態にあり、同虫の多発時には、夕刻から夜間にかけて灯火を求めて屋内飛来するためで、単純に予測し得なかった衛生害虫化を元唆する事例と考える。

同虫による被害状況について、県立農業試験場の資料によれば、1977年の初秋に浦添市から宜野湾市にかけて、サトウキビ圃場に多発し、宜野湾市衛生課による駆除がなされた記録があり、また、琉大農学部の資料では過去に西表島で牧草のネピヤグラスに大発生したことがあるが、環境被害や人体被害をもたらす程の多発例はなかったよう

だ。

突発的な多発による被害を受けた本事例も原野や農耕地域の開発、農薬利用の変遷、宅地の拡大などで、人間と昆虫との接点において、今後も起こり得る問題として考えられる。

まとめ

1）1979年8月中旬から11月にかけて、沖縄本島中部、宜野湾市の志真志団地内においてハゴロモが多発し、夜間、灯火を求めて屋内飛来、その大部分はフタホシハゴロモであった。

2）被害戸数は、20戸中12戸に環境被害がみられ、その中2例に接触性皮疹がみられた。

3）加害虫による皮疹テストは、個人差はあるが、皮膚炎の起こり得ることを確認した。

この報告をするに当たり、標本の同定および被害情報を提供して下さった琉球大学農学部の東清二教授ならびに、県立農業試験場の関係者に感謝致します。

参考文献

1）朝比奈正二郎、他14（1964）：
原色昆虫大図鑑、第3巻、129～130、北隆館東京

2）素木得一（1958）：衛生昆虫、196～203、北隆館、東京

3）高橋正和（1975）：不快昆虫の新顔、テンウスイロヨトウ、衛生動物、26（1）、66